

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Plagiarism or communal sensibility? :
Wordsworth, copyright, tradition

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉川, 朗子, Yoshikawa, Saeko メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1792

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



剽窃か感受性の共有か ——ワーズワス、著作権、伝承——

吉川 朗子

0) はじめに

剽窃、模倣、借用、翻案（あるいは本歌取り）といったことは作品受容の様々な形とも言えるが、著作権や作品流通、知識や感受性の共有、伝統・伝承等の問題とも絡まって、時に非難され、時に容認される。ワーズワス（William Wordsworth, 1770-1850）は剽窃や著作権保護、作品流通などの問題にとりわけ敏感であったとされるが、自らの作品が（無断に）模倣・引用・転載されたり、海賊版が出されたりすることに関して、一貫した態度をとっているようには見えない。たとえば、バイロン（George Gordon Byron, 1788-1824）やジョン・ウィルソン（John Wilson, 1785-1854）を剽窃者として非難する一方で、‘The Wishing Gate’（1828）を基にして書かれた‘The Wishing Gate’（1830）という短編（これについてもウィルソン作という説もあった）、あるいはランドン（Letitia Elizabeth Landon, 1802-1838）やマッケイ（Charles Mackay, 1814-1889）らの同タイトルの詩については黙認しているように見える。この‘The Wishing Gate’については、著作権保護の関係で、詩集という形の著作物にはなかなか収録されなかった一方で、ガイドブックなどには（おそらく無断で）自由に転載されていた。矛盾して見えるこれらの事象をどう解釈すべきかを考えていくと、美学的観点から作家のオリジナリティを主張し、経済的権利として著作権の保護を強く求めつつも、知的財産としては作品が広く流通して感受性が共有されることを望んでいたワーズワスの姿が浮かび上がってくる。本稿では、まず「剽窃」をキーワードに、創作原理としてのオリジナリティをワーズワスがどう見ていたのかを確認した後、作品流通と著作権保護の関係を彼がどう捉えていたのか考察する。そして‘The Wishing Gate’をめぐる作品群を例に、作品が模倣、共感という形で受容され、共有財産のように扱われていく様子を辿り、ワーズワスにはオリジナリティを主張するばかりでなく、伝統／伝承に連なることを望む面もあったのではないかということ論じる。

1) 剽窃とオリジナリティ

マツエオによると、ロマン派詩人たちにとって剽窃は倫理的な問題ではなく、もっぱら美学的な問題であった。そして、たとえ他人の作品からフレーズ

やアイデアを無断借用・模倣していても、元の作品よりも質のよいものに仕上がってれば、それは問題視されなかったのである (Mazzeo 2-3)。そのことはハズリットがバイロンを評した次の文からも窺えるだろう。

if he [Byron] can borrow an image or sentiment from another, and heighten it by an epithet or an allusion of greater force and beauty than is to be found in the original passage, he thinks he shows his superiority of execution in this in a more marked manner than if the first suggestion had been his own. (Hazlitt 162)

元の作品よりよいものに仕上がっているか否かが「剽窃」の謗りを免れるか否かの基準であり、線引きは恣意的なものとも思われるが、ハズリットはバイロンを擁護した。それに対してワーズワスは、バイロンによる自分の作品の模倣を厳しく非難した。*Childe Harold's Pilgrimage* 第3篇はほとんど‘Tintern Abbey’からの剽窃である、と非難したのである。確かに当該箇所を読むと、風景と内面との交流、自然崇拜の態度などワーズワスを想わせる個所が見受けられるが、これはむしろ感受性の共有あるいはアリュージョンと呼ぶべき性質のものではないだろうか。なぜワーズワスは腹を立てたのか。1823年12月26日付のテイラー (Henry Taylor) へ宛てた手紙で、彼は次のように言っている。

as far as I am acquainted with his works, they [his poetical obligations to me] are most apparent in the 3rd canto of Childe Harold; not so much in particular expressions, tho' there is no want of these, as in the tone (*assumed* rather than natural) of enthusiastic admiration of Nature, and a sensibility to her influences. (Wordsworth, *Letters, Later Years* 1: 237)

ある個別の箇所を模倣だと非難するわけではないが、熱烈な自然崇拜者である「ふり」、自然の影響を感受している「ふり」をしていることが気に入らないと言っている。感受性の見せかけの共有に対して腹を立てたのだ。この批判的射ているか否かは別として、ワーズワスには、バイロンが本当の自分を偽り「ワーズワス風」を装っているように見えた——あるいは、バイロンの本質が表れていないと見えたのだ。¹

1 Thomas Moore はワーズワスがバイロンの剽窃について語ったこととして、1820年10月27日付の手紙で次のように回想している。‘Wordsworth ... Spoke of Byron’s plagiarisms from him ——the whole third Canto of Childe Harold’s founded on his style & sentiments——the feeling of ↗

このことから示唆されるように、ワーズワスにとってのオリジナリティとはアイデンティティとほぼ同意語だったと思われる。彼はトマス・グレイについても、鳥の喩えを用いて批判している。

Gray failed as a Poet, not because he took too much pains, and so extinguished his animation; but because he had little of that fiery quality to begin with; and his pains were of the wrong sort. He wrote English Verses, as he and other Eton school-Boys wrote Latin; filching a phrase now from one author, and now from another. I do not profess to be a person of very various reading; nevertheless if I were to pluck out of Grays tail all the feathers which, I know, belong to other Birds he would be left very bare indeed.²

他の鳥からくすねてきた羽根を「装った」鳥は、それぞれの羽根の出自を言い当てることはできても、それ自体がどんな姿をしているのかが見えてこない。ワーズワスのこのグレイ評にも賛否両論あろうが、古典作品に対する博識がつきはぎにされているようにしか見えず、グレイ自身の個性、感性が現れてこないことに、ワーズワスは苛立ちを感じたのであろう。「詩は力強い感情がおのずと湧き上がって来たものである」という *Lyrical Ballads* 第2版（1800）への序文からの有名な一節を借りるならば、ワーズワスにとっての作品のオリジナリティとは、自分の内面から溢れ出てきたもの——他人の借り物でない、自らの個性——が作品に反映されていることだったと考えられる。ウィルソンの *The Trial of Margaret Lindsay*（1823）を剽窃だとして完膚なきまでに非難するのも、ウィルソン自身の個性の現れた作品ではなく、*The Excursion*（1814）などに示されたワーズワスの考え方、感性を皮相的にパロディ化したものと看做したからだろう。³ パロディというのは他人のアイデンティティを「装う」も

↘ natural objects, which is there expressed not caught by B. from Nature herself but from him, Wordsworth, and spoiled in the transmission——Tintern Abbey the source of it all——from which same poem too the celebrated passage about Solitude in the First Canto of C. H. is (he said) taken, with this difference that what is naturally expressed by him has been worked by Byron into a laboured & antithetical sort of declamation {on the subject——}'. (Moore 355).

2 Wordsworth to R. P. Gilles, 15 April 1816 (Wordsworth, *Letters, Middle Years* 2: 301)

3 ウィルソンの *The Trial of Margaret Lyndsay* は1823年に出版される。その時点では特に何も言っていないが、1828年12月に *Blackwood's Edinburgh Magazine* に出たウィルソンの記事で自分の宗教観が批判されていたことを受けて、翌年1月27日付のロビンソン（Henry Crabb Robinson）への手紙のなかでワーズワスはこの小説を激しく非難する。‘Have you peeped into his [Wilson’s] Trials of Margaret Lyndsay——you will there see to what an extent he has played the Plagiarist——with the very tale of Margaret in the Excursion, which he abuses——and you will also, with a glance learn, what passes with him for poetical Christianity——more mawkish stuff I never encountered’ (Wordsworth, *Letters, Later Years* 2: 17). *The Trial of Margaret Lindsay* もワー

のであり、ワーズワスにとってそれは剽窃に等しく、オリジナルな（価値ある）作品とは言えない、ということだったようだ。

このように、ワーズワスは美学的観点から、作家が自分のオリジナルな作品を作ろうという努力をせず他人の作品を模倣したりパロディ化したりすることに批判的であったが、他方第3節で見ると、彼にはまた、自分の作品が模倣・翻案されることを許容する側面もある。確かに作品が模倣されたり、パロディ化されたりするということは、その作家の知名度を示すものでもあり、作品の売れ行きにも関わってくる。第2節では、自らの作品の受容、流通のあり方に関心を持っていたワーズワスの両義的な態度について、彼がやはり強い関心を示していた著作権保護との関係から確認しておきたい。

2) 著作権と作品流通

経済的権利としての著作権については、よく知られているように、ワーズワスはこれができるだけ長く保護され、子孫にも遺産として残せるようにと強く願っていた。1828年パリの出版社ガリニャーニ（Galignani）から *The Poetical Works of William Wordsworth* が一巻本の形で安価で出版されたことは、五十代にしてようやく作品が売れ始めたワーズワスにとっては大きな衝撃だった。このことに関しては繰り返し手紙のなかに言及され、作家の知的労働が軽く見られ、その経済的権利が保護されていないことへの嘆きが吐露されている。この詩集はイギリスで売られていた五巻本の三分の一ないし四分の一の価格で買えるものであり、この頃にはロンドン——パリ間の人や物の往来も多くなっていたから、国内における正規版の売り上げにも大きな影響を与えた。⁴ 1830年には既にロンドンにおいてさえ——これは違法だったが——買い求めることができたという（Wordsworth, *Letters, Later Years* 2: 225-26; 4: 328）。

ガリニャーニ版がよく売れた背景には、むしろその安さが一番の要因だろうが、ワーズワス自身も褒めているように、版組の正確さ、読みやすさもあったようだ（Wordsworth, *Letters, Later Years* 1: 690-91）。ガリニャーニ版は、一方では著作権法改正を求める活動へとワーズワスを駆り立てたが、他方では本の体裁や価格と流通の関係について彼に意識させることにもつながった。たとえ

ワーズワスの宗教観に対する批判を小説の形で行ったものと読むことが出来、そのためワーズワスの不興を買ったのだろう、とマッツェオは推測している（Mazzeo 154）。

4 See, for instance, Wordsworth, *Letters, Later Years* 1: 658; 1: 659; 2: 28. ガリニャーニ版はイギリス国外で販売している限り違法行為ではない。これはワーズワスも認めていた。See Wordsworth, *Letters, Later Years* 2: 268. ガリニャーニ版はパリのみならずローマでも売られていたようだ。トマス・オーウェンはイタリアに来るイギリス人旅行者のために、ワーズワスの詩集を売るマーケットがあったのではと推測している（Owen 26）。

ば1年間で五巻本を12セット売った本屋が1ポンド以下ならばその10倍は売れるだろうと言ったと聞いて、ワーズワスは買い求めやすい価格の版を出すよう出版社に掛け合い、1ページにソネットなら2つ収め、また1ページに収める行数を少し増やすことで全体のページ数を減らし、価格を抑えた四巻本を1832年に出版している⁵。また1845年に一巻本を出す際には、ガリニャーニ版より魅力的な本となるよう意識して、ゆったりとしたレイアウトにするよう指示している⁶。

ワーズワスが作家のコピーライト（コピーを作る権利）を主張したのは、必ずしも経済的利益確保のためばかりではなかった。作品の世の中への出され方を自分でコントロールしたいという思いもあったと考えられる。よく知られているように、ワーズワスは、作家の人生は作品にこそ表れていると主張していた⁷。そうであるならば、自らの個性が刻印されたオリジナルな作品を、自分の意に沿わない形で世の中に広められたくないという思いがあっても不思議ではない⁸。ワーズワスが自分の詩集の、本としての体裁・活字組みについて非常に注文が多かったことはすでに指摘されている⁹。1843年にチェンバーズ（Robert Chambers）という人物が自分の編集する著作物にワーズワスの作品を引用させてほしいと願い出てきた際、ワーズワスは許可するが、送られてきた本——*Cyclopaedia of English Literature*（1844）——を見て慄然とする。「引用」という枠を超えたほとんどアンソロジーと言っていいほどの分量を掲載していたのが主な理由だが、タイポグラフィーの点から見ても、大文字の小文字化、韻文段落の区切り方の改変など、版組の不正確・不誠実さも不快感の原因で

5 See Wordsworth, *Letters, Later Years* 2: 261. 1832年版は4年間で1600部売れた。

6 GalignaniだけでなくMurrayやLongmanも意識して、これらの版よりもスペースをゆとりとったレイアウトにするよう心がけ、折れ句ができるだけ生じないように、ソネットなど短い詩が2ページにまたがらないようにレイアウトし、また違いを出すために、作品の並べ方にも拘った（話のつながりや場所のつながりを大事にする配置にしてある）。See Owen 34. またこの版を作るにはHenry Reed編纂の一巻本（1837）も参考にしているという。See Mark Reed [2013] 1: 135, 184; Wordsworth, *Letters, Later Years* 3: 647. 一巻本を出すことはGalignani版が出た頃から考えていたようだが、ワーズワスは、すでに出版している五巻本の売れ行きに影響することを考え、時機を見ていた。

7 たとえば*A Letter to A Friend of Robert Burns*（1816）のなかで、ワーズワスは‘If their [poets’] works be good, they contain within themselves all that is necessary to their being comprehended and relished’（17）と主張している。See Wordsworth, *Prose Works* 3: 122.

8 こうした考え方は、現在の著作権に含まれる著作者人格権（moral rights）（＝氏名表示権、同一性保持権、名誉声望保持権などからなる著作者の権利）という概念につながると思われる。著作者人格権というものが明確な概念としては存在していなかった19世紀前半のイギリスにおいて、ワーズワスはいち早くこうした権利を保護する必要性を主張していたと、園田暁子氏は指摘している。

9 See Owen 24; Mark Reed [1997] 69-92. またRichard Menkeは‘I wondered lonely as a cloud’の二つの版を比べ、ワーズワスがページ上のレイアウトに拘っていたことを示している。See Menke 23-41.

あったと考えられる。¹⁰ ガリニャーニについて苦々しい思いを示しつつも本の出来栄えに感心し、そこから学んで新しい版を作っている点から考えても、ワーズワスが自分の作品の公表のされ方に強い関心を持っていたことが窺える。

チェンバーズが英文学事典を編集するに当たって一応ワーズワスに断りを入れたことには、1842年に著作権法が改正され、こうした問題が強く意識されるようになったことも関わっているだろう。この法改正により、作品が出版されてから42年間あるいは作者の死後7年間どちらか長い期間著作権が保護されることになった。チェンバーズに対しては腹を立てただけだったが、バーンズ (James Burns) という出版社に対しては、ワーズワスは法的措置に踏み切った。1842年、湖水地方西海岸部にあるセント・ビーズ・グラマー・スクールの教師ゴフ (Henry Gough) という人物から、学校用の、あるいは高価なモクソン版 (六巻本) は購入できない収入の低い階層向けの詩選集を出したいので許可してほしいという申請を受けて、ワーズワスは了承していたが、翌年実際に出版された *Select Pieces from the Poems of Wordsworth* (1843) を見て彼は驚愕する。挿絵をふんだんに取り込んだ豪華な版だったからである (Wordsworth, *Letters, Later Years* 4: 504; 4: 509-510)。ワーズワスとモクソン社は直ちに抗議し、第2刷からは、モクソンとバーンズの共同出版という形を取らせ、売り上げ金の一部をモクソンへ納めることに合意させている (Mark Reed [1997] 69-71)。

興味深いのは、もともと学校向けの詩集、貧しい人向けの安い詩集だと思っていたので、著作権使用料など請求していなかった、とワーズワスが言っている点である。

In fact I expected that the price of the Book would not exceed half a crown or three shillings at the utmost, and as neither I nor Mr Moxon nor Mr Gough looked to any pecuniary advantage, or wished for any, the work would have had no expenses to bear of Copyright or Editorship, and might have been sold cheap accordingly. Mr. Charles Knight published a play of Shakespeare (sometimes extending to 120 pages) for sixpence—the paper and type are unexceptionable, so that no Copyright profit being in my case looked for, the Selections might have been sold proportionately cheap, care being taken that they did not go to an extent which would obviously be injurious to the sale of

10 短い伝記的な記述も含まれているが、ここにも誤りが散見される。See 'William Wordsworth', in Chambers 322-33.

11
the Works in a Body.

ワーズワスは、自分の詩が教科書や安い選集として出版されることについては文句を言っていない。むしろ著作権使用料を請求しないという形で、安い版を作れるよう協力する姿勢を見せている。しかし、正規版に手が届く購買層にアピールするような、豪華な挿絵入りで多くの作品が収録された海賊版が正規版の売り上げに打撃を与えることは、黙認できなかったのだ。ガリニャーニ版のときは安価であることに懸念を示したのに対し、今回は高価な本であることに憤っている点は一見矛盾しているが、いずれの場合も出版社が不当に利益を得ようとしていると見えたことが、憤慨の原因だったと思われる。¹²

ここで名前が挙がっているチャールズ・ナイト (Charles Knight, 1791-1873) というのは知識普及協会 (Society for the Diffusion of Useful Knowledge = SDUK) の出版部門を請け負っていた人物で、文学・科学・芸術など様々な分野の読み物を安価に提供して広く普及させることに情熱を燃やし、とりわけ *The Penny Magazine* (1832-1845) の発行で有名である。このナイトが出したシェイクスピアの普及版 (*Pictorial Shakespeare*, 1838-1841) にワーズワスが興味を示し、自分の作品もそうした形で多くの読者層に行き渡るのであれば歓迎するという態度を取っているのは興味深い。実際ワーズワスの作品はナイトの編纂した *Half Hours with the Best Authors* (1847) に多数抜粋されているが、ワーズワスはこの本に好意的である。また *The Penny Magazine* には 'The Duddon Sonnets' (1820) や *The Excursion* (1814) からの抜粋と共にこれらの作品に描かれた場所が挿絵入りで紹介された他、*A Guide through the District of the Lakes* (1835) からも多く引用され、ワーズワス観光を促進することに貢献した。¹³ つまりワーズワスは、自分の知的労働に対する経済的権利が自分とその子孫に対して保護されることを主張し、その権利が出版社や富裕層に侵害されることについてはこれを阻止しようとする一方で、自らの作品が雑誌などの安価な媒体に抜粋されて広く普及することについては容認していたと考えられる。

11 Wordsworth to Christopher Wordsworth, 20 December 1843, *Letters, Later Years*, 4: 509-510.

12 タイポロジーやページ割の点でも相当誤りや勝手な改変があり、これはこれで不満だったと思われる。ワーズワスは挿絵に関しても「他に流用できそうだね」と嫌味を言っているが、挿絵の人を惹きつける力は認めざるを得なかったようだ。'I am a little too proud to let my Ship sail in the wake of the Engravers and the drawing-mongers' (Wordsworth to Edward Moxon, 14 May 1833, *Letters, Later Years*, 2: 616) と言って自分の詩集に挿絵を載せることに抵抗を感じていたワーズワスだが、1845年に出版した一巻本では、口絵にライダル・マウントの挿絵を載せることを了承している。

13 *The Penny Magazine* は多い時には20万部発行されたというので、ワーズワスの作品を広めることに大きく貢献したであろう。

同じことは湖水地方へのガイドブックに作品が多数引用されたことについても言えるのではないだろうか。ガイドブックへの引用の場合、抜粋される作品は湖水地方を扱ったものに限定され、引用される分量も比較的少なかったため大きな問題は起きなかったということはあるだろう。けれども *A Guide through the District of the Lakes* (1835) からの引用や ‘The Duddon Sonnets’ の注からの抜粋などはかなりの分量にのぼり、時に出典が示されないこともあった。作品によっては全文あるいは相当量が引用されることや、引用が不正確なこともあり、現在の基準で考えれば著作権法に抵触するのではと思われるケースも見受けられる。マッケイは *The Scenery and Poetry of the English Lakes* (1846) というガイドのなかでダドン川を紹介する際、ワーズワスのソネットを全編ここに引用したいけれども、著作権法に抵触するからやめておくと言っており (111)、ガイドブックに著作権法の適用が全くなかったわけではなさそう¹⁵。けれどもガイドブックへの文学作品の引用・抜粋は許容されていたように見えるし、ワーズワスも、廉価版の詩集の場合と同じく、ガイドブックへの作品の引用・転載を容認していたと思われる。*The Excursion* などは相当高価な本だったがガイドブックへの抜粋を通して広く知られるようになったと言え、こうした媒体を通してワーズワス・ファンとなった文学旅行者が数多くライダル・マウントを訪れていたことを鑑みると、ワーズワスもこうした事実¹⁷に気づいていなかったとは考えにくい。

さて、マッケイの本から約 10 年後の 1859 年に出版されたガイド *A Handbook to the English Lakes* のなかで、ジェイムズ・ペインはダドン溪谷について少しでも詩的なことを言うと著作権法に抵触する恐れがある (‘But we are infringing upon copyright here, for the valley, as far as anything poetical pertains to it, belongs to the late Mr. Wordsworth’) ¹⁸と言っている (63)。詩人の死後、著作

14 ‘The Somnambulist’, ‘To Joanna’, ‘The Brothers’, ‘The Wishing Gate’, ‘The Yew Tree’, ‘Long Meg and her Daughters’, ‘Written with a Pencil upon a Stone in the Wall of the House (Out-house), on the Island at Grasmere’ など。

15 マッケイ自身詩人・小説家であるので、著作権に敏感だったのかもしれない。

16 マツツェオによれば、19 世紀において著作権が保護されたのは文芸作品のみであって、客観的な情報提供を主たる目的とするガイドブックには著作権は認められなかったようだが (Mazzeo 4)、逆にガイドブックへの文学作品の無断抜粋も、大目に見られていたのかもしれない。

17 死後出版の *The Prelude* (1850) も著作権の関係で詩集の形での流通は遅れたが、ガイドブックには自由に抜粋されていた。William Knight 編纂の *The English Lake District as Interpreted in the Poems of Wordsworth* (1878) や、その挿絵入りバージョンとも言える Harry Goodwin の *Through the Wordsworth Country* (1887) などは、ガイドブックとアンソロジーの中間領域の作品と言え、著作権の扱いは微妙だったのではと思われる。

18 ペインは *A Description of Furness Abbey and its Neighbourhood* (1864) の中でも同じことを言っている (52)。

権の管理がいつそう厳しくなったことが示唆されるが、この発言は、ダドン溪谷の魅力はワーズワスのソネット群がすでに描いてしまっており、後続の作家たちがこの溪谷について何かを語るには、ワーズワスというオリジンを意識せざるを得ない、オリジナルを何かしら模倣することになってしまう、と愚痴をこぼしているようにも聞こえる。あるいは、風景・場所と文学作品が分ち難く結びついてしまった場合、もはや作品の著作権を主張することは馬鹿げていると暗に言いたいのかも知れない。

グラスミアにある *The Wishing Gate*——願掛けの門と呼ばれる門の場合も、ワーズワスの作品と分ち難く結びついてしまったために、もはやそのオリジンを意識せずには新たな作品など産み出せなくなってしまった場所と言える。けれどもこの場所の場合は、著作権などお構いなしに次々と模倣作品、派生作品が作られていき、*The Wishing Gate Circle* と呼ぶべきものが出来上がっていった。そしてワーズワスも敢えてオリジナリティを主張しようとはしなかった。第3節では、ワーズワスの作品が個人の知的財産というよりも共有財産のように扱われていった例として、‘*The Wishing Gate*’ をめぐる作品群について見ていきたい。

3) *The Wishing Gate Circle*

‘*The Wishing Gate*’ は、ワーズワスが *The Keepsake* というギフトブックへの寄稿を依頼されて書いた作品のうちの一つで、1828年に初めて発表された¹⁹。Hope が擬人化されるなど、多少 18 世紀的な雰囲気もある作品だが、旅人をも立ち止まらせる力をもつ風景の静かな美しさ、「土地の霊 (the spirit of the place)」の力を捉えた作品であり、ハートマンが碑文詩と呼んだ系譜に連ねることができるだろう (Hartman 31-46)。 *The Keepsake* 自体が一万部以上売れた人気作品だったが、‘*The Wishing Gate*’ 単独でもさまざまな雑誌、ガイドブックなどに引用され、幅広く読まれた。

1878年4月13日付けの *Manchester City News Notes and Queries* に次のような依頼が出ている。

The Wishing Gate—Wordsworth, I believe, in one of his poems, places a maiden on a beautiful evening beside a gate on the roadside looking down o’er

19 ワーズワスは他に ‘*The Country Girl*’ (‘*The Gleaner*’), ‘*The Triad*’, ‘*A Gravestone upon the Floor in the Cloisters of Worcester Cathedral*’, ‘*A Tradition of Darley Dale, Derbyshire*’ を寄稿し、これに対して 100 ポンドの報酬を受け取っている。しかし版權を売ったわけではないようで、これらの作品は *Poetical Works of William Wordsworth*, 4 vols (London, 1832) に収録されている。

the valley, alone, waiting for or thinking of her lover, and wishing. Can any reader refer me to the poem and the passage? Or to any passage in Keats, Tennyson, or others of our classic poets, where the subject is treated?²⁰

これに対する回答は一週間後に掲載されるが、そこには「願掛けの門についてワーズワスが書いた詩はラトリッジやウォーン社から出版されている廉価版には含まれていない。たぶん著作権上の理由からだろう」(17)とある。ここに示されているように、‘The Wishing Gate’は1871年まで著作権が保護されていた関係で、ラトリッジやウォーン社から出版されて広く出回っていた詩集²¹には掲載されていなかった。ベネット(A.W. Bennett)は1864年に写真入りアンソロジー、*Our English Lakes, Mountains and Waterfalls as Seen by William Wordsworth*を出版する際詩人の遺族の許可を求め、この作品を含めていくつかの著作権が切れていない作品を掲載するが、両者の間に見解の相違があつて揉め、第2版以降作品を引き上げざるを得なかった²²。このようにワーズワス作品に対する著作権は、彼が望んだとおり、死後遺産として子孫に引き継がれ、一定の保護を得られたと見える。

他方で先にも述べたように、‘The Wishing Gate’は1841年に*Black’s Picturesque Guide to the English Lakes*に全文が引用されて以来、多くのガイドブックに全文または一部が引用されるようになり、門自体も観光スポットとして人気が高まっていき、それと連動して作品はますます広く流通していった。従つてマンチェスターの新聞に問い合わせをしてきた人物のように、どこで読んだかは覚えていないがどこかで聞いたことがある、という人は大勢いたと思われる。

興味深いのは、この投稿者が作品を説明するにあたって挙げている「乙女」

20 *Manchester City News Notes and Queries*, 1. 16 (1878): 11.

21 *The Poetical Works of William Wordsworth... with a Life* (London: Routledge, 1858) は、Galls & Inglis (1857) と並んで、*The Excursion* (1814), *The White Doe of Rylstone* (1815), *Poems of 1815* の著作権が切れた後に大量に出版されたステロタイプ版。1892年までに66,000部刷られたという。Birket Fosterによるイラストが8枚挿入されている。See Mark Reed [2013] 1: 313. Warne & Co. というのは Nimmo と共同で出版した *The Poetical Works of William Wordsworth with Illustrations by Keeley Halswell* (Edinburgh: William Nimmo, 1863; London: Frederick Warne & Co., 1863) または Warne から1872年以降に相次いで出された Chandos Posts シリーズ、Lansdowne Poets シリーズかもしれない。これらは1827年の版を利用しているため、‘The Wishing Gate’を含んでいない。Warne から出されたのは125,000部を超えるとされる (Mark Reed [2013] 1: 460-61)。

22 *The Prelude* (1850) からいくつかの пассаージュが抜粋されていたが、これも第2版(1866)から削除される。しかし *The Prelude* は、James Payn の *The Lakes in Sunshine* (1867), W. J. Loftie の *English Lake Scenery from Original Drawings by T. L. Rowbotham* (1875), Payne Jennings の *The English Lakes* (1878) などに抜粋されていく。

のイメージは、実はワーズワスの‘The Wishing Gate’には出てこないということである。この作品では遠くから来た旅人が苔むす門に寄りかかり、愛する女性のことを想うというイメージは出てくるが、乙女が恋人を想うイメージは出てこない。ではどこに出てくるのかというと、明らかにワーズワスを意識して書かれている短編ロマンス‘The Wishing Gate’がまず挙げられる。これは1830年1月 *Blackwood's Edinburgh Magazine* に掲載され、その後アメリカの雑誌などにも転載された。²³ *Blackwood's Edinburgh Magazine* というと、ジョン・ウィルソンがクリストファー・ノース (Christopher North) の名で多くの記事を寄せていた雑誌であり、この短編についても、ウィルソンが書いたのではないかとホッグ (James Hogg) は推測している。²⁴ ウィルソンはワーズワスを誉める記事を多数寄稿する一方で、批判記事やパロディも書いている。1828年には *The Excursion* における宗教観を批判した記事を書いてワーズワスの不興を買ったばかりであり、上述のように、この機を捉えてワーズワスは、ウィルソンが5年前に書いた小説 *The Trial of Margaret Lindsay* を持ち出してきて、これを剽窃だと批判している。けれども、ウィルソンが書いたとも噂され、明らかに自作を模倣しているこの作品については、ワーズワスは何も言っていない。²⁵

この物語では、ヒロイン Medora とその父親 Blessington 大佐はワーズワスのご近所かつ友人という設定になっており、詩人本人から貰ったという詩集の見返しには彼の最新作‘The Wishing Gate’がメドローラの手で書き写されている。そして語り手は、皆が詩を暗誦できるわけではないだろうからと、この作品を全文抜粋するのである。そのため詩の雰囲気は物語全体の雰囲気を決めることになり、物語のなかでは老人 Michael、その幼い孫娘 Mary、メドローラを想う若者 Frederic、メドローラとその父親の五人が五通りの立場で門の傍らに立ち止まり、それぞれ土地の霊 (the gentle spirit of the Gate) のよい感化力を受けて心を癒され、元気付けられることになる。心優しく信心深いメドローラがフレデリックと結ばれるというのが物語の要だが、他の登場人物たちも皆、自分勝手なことを願わず他者のために祈るという態度をとったために願いを叶えられるという筋書きになっている。

この物語を受けて1833年にランドンが発表した同タイトルの詩では、門で願い事をする人々として兵士、水兵、乙女の姿が描かれている。そして1834年に発表されたマッケイの同タイトルの詩で初めて恋する乙女の姿に焦点が当

23 *The Museum of Foreign Literature and Science* (New York, April 1830), *The Spirit of the English Magazine* (Boston, June 1830) など。

24 James Hogg to William Blackwood, 4 January 1830 (Hogg 2: 368)。

25 ただし *The Wellesley Index* はこの物語の作者を Fanny Foss としている (1: 33)。

てられ、彼女が真夜中に門に寄りかかり、登ってくる月をぼんやり眺めながら恋人の帰りを待ちわびていると、当の恋人が現れるという内容が展開される。²⁶

この詩を書いたときマッケイはまだグラスミアにある「願掛けの門」を訪れたことはなかったことを考えると、²⁷彼はワーズワスの作品に触発されてこの詩を書いたと推測できる。作品には「ウエストモアランドにあるグラスミアの谷には、『願掛けの門』として知られる門があり、そこで成された穏当な願い事はきっと叶えられる、という言い伝えがある」という頭注が付けられているが、これはワーズワスの作品につけられた頭注とほぼ同じである。ランドンの作品にも似たような脚注がつけられている。‘The Wishing Gate’について次々に模倣作品が作られたのは、この注があったからではないだろうか。注が伝えているのは、この作品のオリジンは古くからの言い伝えにあるということである。作者不詳の伝承には著作権はない。だからこそマッケイもランドンも気兼ねなく同じ話に基づいた詩を作ることができたのではないだろうか。少なくとも、伝承に言及した注をつけることで、彼らはワーズワスを真似たのではなく、同じ言い伝えを基に書いたと主張することができる。ただし、管見の限りワーズワス以前にこの門の言い伝えについて活字化されている文献は見当たらない。²⁸伝承に基づくように見せつつ実はワーズワス自身の創作、という作品が他にもあることを考えると、これも創作だった可能性もある。²⁹いずれにせよ、伝承に触れた注をつけた以上ワーズワスにはその作品が自らのオリジナルであることを主張することは出来ないのであり、逆に言うと、ワーズワスはこの作品について著作権を主張するつもりはなかったということではないだろうか。

短編物語 ‘The Wishing Gate’ やランドン、マッケイの詩作品をワーズワスがどう受け止めていたのか、はっきりとは分らないが、1841年に書かれた続編 ‘The Wishing Gate Destroyed’ はひとつのヒントを与えてくれるだろう。これは、

26 ‘Let the maiden pause to frame / Blessings on some treasured name’ (Landon, ‘The Wishing Gate’, 13-14); ‘Pale clouds obscured the thoughtful moon, / The hour was growing late, / The maiden, pensive and alone, / Leant o’er the Wishing-Gate’ (Charles Mackay, ‘The Wishing-Gate’, 25-28).

27 彼はここを1845年夏に初めて訪れているが、場所が分からずアンプルサイドで *Hudson’s Complete Guide to the English Lakes* (1842) を購入して場所を確かめている。See Mackay 30.

28 Dorothy Wordsworth の日記を見ると、この門はワーズワス・サークルにおいては Sara’s Gate と呼ばれていた。非常に眺めの美しい場所であり、1801年3月にグラスミアを訪れた Sara が名前を刻んだことから、門を Sara’s Gate と呼ぶようになったと言う。See Dorothy Wordsworth, *The Grasmere Journals*, ed. Pamela Woof, 39, 44, 68, 133.

29 Aira Force にまつわる話としてワーズワスは ‘The Somnambulist’ という作品を作っているが、伝承に基づいているように見えながら実は自身のオリジナルであることを、ワーズワスは作品への注で告白している。

門が取り壊されたという（後に誤りであったことが判明する）噂に基づいて書かれたものだが、第6連でワーズワスは、‘Where, for the lovelorn maiden’s wound, / Will now so readily be found / A balm of expectation?’ (31-33) と、門へやってくる恋する乙女の姿に触れている。これは他の作品群への応答とも取れるだろう。

ジェイムズ・ペインは1850-60年代にこの門について詩と短編2編を書いているが、とりわけ短編の方では、田舎の娘と若者の恋物語の大事な舞台設定としてこの門を扱っている。³⁰ 1863年オックスフォードの学生が作ったという詩のなかでは、だれか素敵な娘が自分のことを門のそばで想ってくれないだろうか、と夢見る詩になっている。³¹ 1866年に *The Leisure Hour* に発表された同タイトルの詩では、一人の女性が門にたたずみ、船の事故で死んでしまった恋人と昔ここへ来て願い事をしたことを思い出す、という内容になっている。³² こうしてグラスミアの古い街道沿いにある眺めのよいこの門は、愛する人のことを想う女性のイメージと結びついていったのである。また、門のそばでお金持ちになることを願い、好きだった若者をないがしろにする発言をした娘が、家へ帰ると金持ちになれたもののしわくちやおばあさんになってしまった、といった少し教訓めいた内容のコミカルなバラッドも出回った。³³ ワーズワスが本当に言い伝えを基にして書いたのか、それとも彼の創作だったのかは分からないが、彼の作品をきっかけとして願掛けの門にまつわる新たな伝承ができていったのは確かだろう。

従って *Manchester City News* に問い合わせをした人物が実際に読んだのはワーズワスの作品ではなく、何か別の作品だった可能性もある。実際彼はワーズワスじゃなくてテニソンだっけ、キーツだっけ、とも訊ねており、誰が作ったのかはあまり重要でなかったのかもしれない。このように自分の作品が不正確に伝わること、あるいは誰の作品か分からないまま読まれることについて、ワーズワスはどう思っていたのだろうか。‘The Wishing Gate’ の4-5連で彼は次のように言っている。

30 James Payn, ‘The Wishing-Gate’, *Chambers’s Journal* 6.149 (1856): 300-303; ‘At the Wishing-Gate’, chapter 7 of *Bentinck’s Tutor, or, One of the Family*, 2 vols (London: Sampson Low, 1868).

31 ‘At the “Wishing-Gate” of Grasmere’, *College Rhymes; contributed by members of the University of Oxford & Cambridge*, vol.4 (Oxford: T&G Shrimpton, 1863), 92-93.

32 I. F., ‘The Wishing-Gate’, *Leisure Hour* 15 (1866): 95.

33 J. E. Carpenter, music by N.J. Sporle, ‘The Wishing Gate’, *The Book of Modern Songs*, ed. J. E. Carpenter (London: Routledge, 1858), 77-78.

Inquire not if the faery race
 Shed kindly influence on the place,
 Ere northward they retired;
 If here a warrior left a spell,
 Panting for glory as he fell;
 Or here a saint expired.

Enough that all around is fair,
 Composed with Nature's finest care,
 And in her fondest love;
 Peace to embosom and content,
 To overawe the turbulent,
 The selfish to reprove. (19-30)

なぜこの門が不思議な力を持つようになったのか——妖精のせいなのか、兵士や聖人がここで果てたのかなどといった謂れ、オリジンを求めてはいけない、と言っている。そして続けて、周りの風景が美しく穏やかであるというだけでいいではないか、と諭す。謂れは分からなくとも、昔から多くの人々が、遠くから来た旅人でさえも、苔むした門にもたれて知らぬ間に土地の影響力、不思議な力を受け取り、愛する人のことを想ってきた、それでいいではないか、と言うのである。

Yea! even the Stranger from afar,
 Reclining on this moss-grown bar,
 Unknowing, and unknown,
 The infection of the ground partakes,
 Longing for his Belov'd——who makes
 All happiness her own.

Then why should conscious Spirits fear
 The mystic stirrings that are here,
 The ancient faith disclaim?
 The local Genius ne'er befriends
 Desires whose course in folly ends,
 Whose just reward is shame. (31-42)

こうした態度は、これらの作品群のオリジンは誰であるかはどうでもよく、作品群が全体として多くの人に読まれ、共感を呼び、土地に根付いた伝承として共有されることを肯定する態度を反映しているように思われる。作品の頭に、伝承に基づいていることを知らせる注をつけたことも、そうした態度の表れとも言えるだろう。

上に引用した一節は、実際に多くの旅行者たちを門に引き寄せ、そこから眺める穏やかで美しい風景の力も手伝って彼らを感化し、願掛けの門にまつわる言い伝えを信じる力を強めていった。したがって、後続の作家たちが同じ題材をもとにして似たような作品を作ったとしても、それは剽窃とか著作権侵害などではなく、感受性の共有と看做すべきなのだろう。彼らは、ワーズワスの作品というよりも、門とその周囲の風景自体がもつ力、それを信じる人々の心に感化されて作品を生み出していったとも言える。少なくともワーズワスはそうした現象に異を唱えていない。‘The Wishing Gate’は、特定の場所、風景と結びつき、さらには観光——現実にその門を訪れて願い事をするという人々の行為——と結びつくことで、ワーズワスという一人の作家のオリジナリティ、著作権というものを超えていった作品と言えるだろう。作家の個性が刻印されたオリジナルな作品について、作家が知的所有権を有することを要求したワーズワスではあるが、他方では、オリジナリティ、著作権を主張することを放棄し、伝統・伝承に連なることで作品が風景に組み込まれ、広く共感を呼んで受容されていくことを求める一面もあったと言えるのではないだろうか。³⁴

* 本論は、イギリス・ロマン派学会第39回全国大会のシンポジウム「ロマン派における『オリジナリティ』を考える——剽窃、引用、翻案と知的所有権の意識」の講師として発表した内容を改稿したものである。

参考文献

Primary Sources:

Chambers, Robert, ed. *Cyclopaedia of English Literature*. Edinburgh: William & Robert Chambers, 1844.

Hazlitt, William. *The Spirit of the Age*. London: Henry Colburn, 1825.

34 湖水地方の伝説・伝承を集めた Lorenzo Tuvar の *Tales and Legends of the English Lakes and Mountains* (1852) には、興味深いことにワーズワスの作品から7つ——‘Fidelity’, ‘The Somnambulist’, ‘The Shepherd Boys’, ‘The Brothers’, ‘Michael’, ‘Hart-Horn Tree’, ‘For the Spot where the Hermitage stood on St Herbert’s Island, Derwent-water’——が採用されている。これらの作品のなかには確かに実話や伝承に基づくものもあるが、ワーズワスの創作の数々が土地に纏わる伝承として扱われているのが興味深い。Tuvar は著作権料を払ったのだろうか。

- Hogg, James. *The Collected Letters of James Hogg, vol.2, 1820-1831*. Ed. Douglas S. Mack & Gillian Hughes. Edinburgh: Edinburgh University Press, 2006.
- Knight, Charles, ed. *Half Hours with the Best Authors, Selected and Arranged with Short Biographical and Critical Notices by Charles Knight*, 4 vols. London: Charles Knight, 1847.
- Landon, Letitia Elizabeth. 'The Wishing Gate'. *Fisher's Drawing-Room Scrap-Book for 1834, with Poetical Illustrations & C. by L.E.L.* London: Fisher, 1833.
- Mackay, Charles. *The Scenery and Poetry of the English Lakes. A Summer Ramble*. London: Longman, 1846.
- . 'The Wishing-Gate'. *Songs and Poems*. London: Cochrane & M'Crone, 1834.
- Moore Thomas. *The Journal of Thomas Moore: 1818-1820*. Ed. Wilfred S. Dowden. London: Associated University Press, 1983.
- Payn, James. *A Description of Furness Abbey and its Neighbourhood. Illustrated with Photographs, a Map of the District, and a Ground-plan of the Ruins*. London: Simpkin, Marshall, 1863.
- . *A Handbook to the English Lakes*. London: Whittaker, 1859.
- Wilson, John. *The Trial of Margaret Lindsay*. Edinburgh: William Blackwood, 1823.
- Wordsworth, Dorothy. *The Grasmere Journals*. Ed. Pamela Woof. Oxford: Oxford University Press, 1993.
- Wordsworth, William. *The Prose Works of William Wordsworth*. Ed. W. J. B. Owen and Jane Worthington Smyser, 3 vols. Oxford: Clarendon Press, 1974.
- Wordsworth, William and Dorothy. *The Letters of William and Dorothy Wordsworth*. 8 vols. Ed. Ernest de Selincourt. 2nd ed. Rev. Mary Moorman and Alan G. Hill. Oxford: Clarendon Press, 1967-93.

Secondary Source:

- Hartman, Geoffrey. 'Inscriptions and Romantic Nature Poetry'. *The Unremarkable Wordsworth*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 1987. 31-46.
- Mazzeo, Tilar J. *Plagiarism and Literary Property in the Romantic Period*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2007.
- Menke, Richard. 'The Wordsworth's Daffodils: on the Page, upon the Inward Eye, in Their Media Ecology'. Collette Colligan and Margaret Linley, ed., *Media, Technology and Literature in the 19th Century: Image, Sound, Touch*. Farnham: Ashgate, 2011. 23-41.

- Owen, Thomas. 'Wordsworth, Galignani, and the Aesthetics of Piracy'. *The Library* 7th series, 12. 1 (March 2011): 23-36.
- Reed, Mark. *A Bibliography of William Wordsworth, 1787-1930*. 2 vols. Cambridge: Cambridge University Press, 2013.
- . 'Wordsworth's Surprisingly Pictured Page: Select Piece'. *The Book Collector* 46. 1 (Spring 1997): 69-92.

